

初期ユーロダラー市場と BOLSA

東北大学 菅原歩

本報告の課題は、ユーロカレンシー市場の歴史的研究の一部として、初期のユーロダラー市場の特徴および同市場における英系海外銀行 BOLSA の業務内容を明らかにすることである。ユーロカレンシー市場の歴史的研究の先行研究としては、市場形成については、G.Jones, *British Multinational Banking: 1830-1990*, 1993, と C.Schenk, 'The Origins of the Eurodollar Market: 1955-1963', 1998 が重要である。Jones は、BOLSA がユーロダラー市場にいち早く参入した要因が同行のドル資金不足であったことを明らかにした。Schenk は、1955 年のミッドランド銀行によるユーロダラー取り入れとポンド転換後の地方自治体貸付が市場の出発点であったと主張した。これは、市場の出発点は 1957 年で、市場形成の主体はマーチャント・バンクや英系海外銀行であったとする通説を覆すものであった。これに対して、G.Burn, 'The State, the City and the Euromarkets', 1999 は、真のオフショア市場としてはドルが再貸付されるべき、との指摘を行っている。ユーロダラー市場がロンドンに立地した要因については、同じく Schenk が上記論文と 'International Financial Centres, 1958-1971: Competitiveness and Complementarity', 2002, などの一連の研究で、ロンドンでは外貨建業務、非居住者業務、外国銀行、非手形交換所加盟銀行などに規制がなかったことをパリやニューヨークとの比較で強調している。ユーロカレンシー市場全体のガバナンスについては、矢後和彦『国際決済銀行の 20 世紀』2010 年、が BIS の視点から、金井雄一『ポンドの譲位』2013 年、がイングランド銀行の視点から、中央銀行の同市場への関与について数多くの重要な事実を明らかにした。

本報告では、上記のような先行研究の成果をふまえ、イングランド銀行アーカイブおよびロイズ銀行アーカイブなどに依拠し、初期ユーロダラー市場で預金シェア第一位であった BOLSA の業務内容を通して、民間銀行の視点からユーロダラー市場の業務実態を明らかにすることを試みる。特に、市場での資金の借り手については、1960 年代中ごろの BOLSA の与信枠設定の史料を利用して具体的に明らかにすることができた。BOLSA の側からすると、ドル貸付については、ニューヨーク支店がロンドン本・支店に匹敵する地位を占めていたことが明らかになった。これは、ロンドン市場とニューヨーク市場の補完的関係の一端を示す事実と考えられる。従来は、ユーロダラーを用いたロンドン市場によるニューヨーク市場への対抗という競争関係が強調されてきたが、今回明らかにされた事実からは、Schenk, 2002, の言うような金融センター間の補完的関係についても今後研究を深めるべきということが示唆されている。